

森のちやれんがニュース

2024 冬

Newsletter vol.38



第23回企画テーマ展「北海道のお葬式」開催 (2024年10月26日～2025年1月13日)

誰もが経験する、人の「死」。しかし、それに関わる「お葬式」の意義や順序、歴史については、あまり注目する機会はないかもしれません。本展では、博物館に残された資料をもとに、近代以降の北海道のお葬式について取り上げました。

1章「アイヌのお葬式」では、アイヌのお葬式にまつわる当館収蔵資料を一挙公開。死者用の靴やカバン、荷縄などを展示し、日常で使われるモノとの比較もしながら紹介しました。

2章「本州からの移住者のお葬式」では、本州以南からの移住者の葬列で使われた輿や参列者の衣装、香典帳や買物帳、葬儀の映像などを展示しました。

本来はほとんど残らないはずのお葬式関連の資料。何が残され、何が残されなかったのか、そしてそれはなぜなのかを考えることで、アイヌと移住者に共通すること・異なることを見つめ直す機会になったと思います。



写真：アイヌの葬式用の荷縄
(研究職員 吉川佳見)

CONTENTS

- ① 博物館活動紹介
北海道開拓の村
歴史的建造物を守るための基本方針
- ② 総合展示室資料紹介・第5テーマ
展示室で活躍する“役者”たち
- ③ 研究活動紹介
アイヌの耳飾り・首飾り、そして衣服
解説案内スタッフレポート
稲わらのかおり
- ④ トピックス
めざせ学芸員！
今年も博物館実習を実施しました
アイヌ民族文化研究センターだより
- ⑤ 北海道立アイヌ民族文化研究センターの20年(上)
- ⑥ 活動ダイアリー
2024年9月～2024年11月の記録

博物館活動紹介

北海道開拓の村 歴史的建造物を守るための基本方針

鈴木明世

研究部博物館研究グループ 研究職員

北海道開拓の村にある52棟の歴史的建造物を維持管理することは、当館の大切な業務のひとつです。

建物の部分的な補修は、指定管理者である北海道歴史文化財団や当館が発注して実施していますが、建物全体を対象とする大規模な改修工事は、2019年度から北海道庁建設部が発注しています。そうした工事には、当館からは、歴史的建造物の維持管理の専門家として私が指導・助言という立場で参画しています。

2019年度に実施した工事の様子は、『森のちやれんがニュース』vol.22(2020冬)にて紹介しました。その後、2020年度に建設部や当館の関係者、歴史的建造物の保存改修に関わる有識者などが集まり、2021～2022年度での旧小樽新聞社と旧近藤染舗の大規模改修工事を事例に、改修計画の議論を交わしました。その中で、将来にわたって活用するための「歴史的建造物の改修の基本的な考え方」を明文化しました。それが、以下の6つの基本方針です。

- ① 創建時の姿を基本とする
- ② 創建～移築前の時点の姿を尊重する
- ③ 意匠を損なわないこと
- ④ 部材を傷めない
- ⑤ 可逆的であること
- ⑥ 新旧の区別が可能であること

『森のちやれんがニュース』
vol.22(2020冬)
当館ウェブサイトでご覧
できます。ぜひご覧ください。



旧小樽新聞社

それぞれ、簡単に説明します。

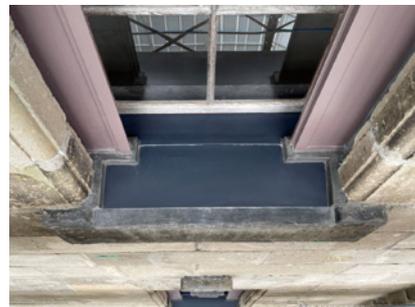
- ① 開拓の村に建物を移築する際、増改築された部分を取り払い、一番はじめ(創建時)の姿に戻しています。その姿にとどめることを工事の大原則としています。その上で、建物の保護や安全性の観点から、変更が生じる場合のために、②～⑥の方針を定めました。
- ② 増改築の過程もその建物の大切な歴史だと考えています。例えば建物保護のために、やむを得ず屋根の材料を創建時とは変更する場合、もしその建物が増改築の過程で板屋根からトタン屋根に変わっていれば、それと同じ色や工法になるように心がけます。
- ③ 意匠とは、建物の「見た目」のことです。歴史的な資料として「見た目」も重要であるため、大きくそれが変わるような改修は行いません。
- ④ 日本建築では、例えば柱などの部材で、劣化・損傷している一部だけを切り取って新しい材料に差し替えるといった、部分的な補修が可能です。必要最小限の補修を心がけます。
- ⑤ 安全のために補強が必要な場合、できるだけ取り外しが可能な方法を検討します。③④⑥も満たしつつ、後の時代に良い工法が見つかった際に、変更できる利点もあります。
- ⑥ 目に見える部分での補強は、できるだけ新しくつけたものだと分かるようにし、創建時のものだと誤解されないように留意します。



旧近藤染舗

大規模改修工事の発注が道庁建設部になったことによって、当館が主体となって実施していたころに比べ、さまざまな立場の方々が工事に関わるようになりました。そうした状況でも、関係者が同じ想いで建物を守っていくために、この6つの基本方針が大いに役立ちます。実際に、2021～2022年度に行われた旧小樽新聞社と旧近藤染舗の大規模改修工事では、設計段階や工事で詳細な工法を検討する際に、関係者が同じ意識を共有できたことには意義があったと実感しました。

この先も、開拓の村での改修工事は行われていきます。私たちがどのような考えで建物を守っていこうとしているのか、少しでも知っていただければ幸いです。



改修事例 旧小樽新聞社の窓まわり
(上：改修前／下：改修後)

建物の構造上、窓枠と石材の間から雨水が入りこみ、内部の壁などの劣化が進んでいました。改修では、建物保護の観点から、すき間を金属板で覆って水が外に流れるようにしました。石材とは異なる素材を使用して新旧の区別を明確にし、取り外しが容易な方法で設置しました。

総合展示室資料紹介・第5テーマ

展示室で活躍する“役者”たち

鈴木 あすみ

研究部博物館研究グループ 学芸員



見る角度によって表情を変えるヒグマの剥製



毛皮と歯は実物を使用、舌の周辺は製作されていることから剥製にもところどころ「作り物」の部分があることがわかる

第5テーマ「生き物たちの北海道」では、森林や海岸などの環境で生きる生物たちのつながりを感じられるように、さまざまな“役者”によって展示がかたちづくられています。一体どんな役者が舞台を彩っているのか、一緒にじっくり見てみましょう。

役者その1「標本」

自然系の展示では、多くの場合標本が主役になります。実際の生物や生物の痕跡を材料にして、不要な部分を除去して他の素材で補ったり、長持ちするように薬品処理をしたりして長く保存できるように加工したものが標本です。例えば、展示室に入っ

て入ってくるヒグマやエゾシカ、木の上で休む鳥たちの標本は「剥製」というもので、動物の皮に特別な処理をしたあとに作り物の中身（木毛やウレタンなど）に被せて作られます。生き生きとした剥製に仕上げるにはポーズや表情づくりに相当の技術が必要で、まさに職人の腕の見せ所です。

剥製をはじめ、昆虫や貝類などの乾燥標本、プラスチックネーション標本をはじめとする樹脂などを染み込ませた含浸標本やフリーズドライ標本など、第5テーマの中だけでもいろいろな標本を見ることができます。これらの魅力は何と言っても実物そのものだという点でしょう。



このアカネズミは凍結乾燥（フリーズドライ）の手法で製作された標本



ヒメマイマイとオオルリオサムシはどちらも乾燥標本

役者その2「模型」

一見すると標本にしか見えないようなレプリカ（複製）から、背景に馴染んだシンプルなものまで、北海道博物館の総合展示には多くの模型が登場します。プロローグにて皆様をお迎えしているナウマンゾウやマンモスゾウは生きていたときのポーズを再現した復元模型です。海岸に漂着したネズミイルカや川で仔グマに咥えられているサケなどは実物に似せた模型です。特に魚類や両生類、爬虫類の標本は非常に褪色しやすく、生きた動物の色や質感をよりリアルにお見せするために模型が採用されることがあります。他には、森林の展示で背景になっている樹木のシルエットパネルも模型です。控えめですが、環境に合わせた樹種が配置されています。ぜひ少し遠くから見てみてください。

模型もプロによって製作されるもので、実物以上に手間がかけられることもあります。ニセモノと一蹴されてしまうこともあります。ぜひ作品としても楽しんでみてください。標本に負けず劣らず、効果的に情報を伝えてくれる心強いメンバーです。

この他に、お客様に大人気の「どんぐりコロコロ」や各種タッチパネルなどの楽しい仕掛けがお客様をお待ちしています。



ほんものそっくりなアズマヒキガエルの模型

研究活動紹介

アイヌの耳飾り・首飾り、そして衣服

亀丸 由紀子

アイヌ民族文化研究センター 学芸員



1993年茨城県日立市生まれ、北海道北見市育ち。弘前大学卒業、北海道大学大学院修士課程修了、2018年より当館学芸員。担当はアイヌ民具。写真は、衣服の資料撮影をしているところ。

気がつけば…7年目？！

2018年4月に学芸員として北海道博物館に採用されてから、気がつけば7年が過ぎようとしていました。思えば、着任当時は、まだ大学院生で、それから本当に色々なことがありました。そんな、長かったようであつという間の7年間について、調査を進めてきたアイヌ民具（資料）を中心に振り返ってみようと思います。

耳飾り

私が初めて出会ったアイヌ民具は、大学の卒業論文執筆を機に取り組んだ、耳飾りでした。アイヌの耳飾りは、金属を素材として作られた本体に、ガラス玉や本体と同じ金属製の飾り玉をつけたものが多く残されています[写真1]。この研究では、この耳飾りを対象として、素材となる金属の成分分析

を行い、その結果を耳飾りの形状による分類結果と照合することで、大まかな年代変遷を見出すことができました。調査の際は、道内の複数の博物館施設の協力のもと、アイヌ民具として所蔵されている耳飾りを数多く調べましたが、初めて本物の耳飾りを手にした時の感動は、今でも忘れられません。

その後、当館に着任してからも調査を続け、1871(明治4)年に開拓使が男性の着用を禁止する以前は、男女の区別なく身につけた耳飾りが、耳たぶに穴をあける代わりに耳飾りを縫い付けた鉢巻を着用する、通常のピアスと同じ太さにアレンジされた製品を購入して身につける、などのように、時代が新しくなるにつれ変化してきた身につけ方にも着目し、情報を収集しています。また、製作地や流通ルートを明らかにするため、耳飾りの飾りの留め方や作

り方(工法)にも着目し、調査を進めているところです。

首飾り

当館に就職してからは、首飾りの調査にも着手しました。調査を始めた理由は、“首飾りは、耳飾り同様、かつては交易によってアイヌ文化にもたらされた移入品の装身具であるため”…と建前はこうですが、本音は、“耳飾り付きの首飾り[写真2]”の存在を知り、疑問を持ったからでした。首飾りの中には、飾り(部品)として耳飾りが用いられるものもあつたようですが、これまでの研究や文献を参照すると、耳飾りを使用しない時は首飾りにかけておいた、という記述も見られます。しかし、実際の資料を見ていくと、付属の耳飾りは開口部が狭く、これを飾りが少なく紐に余裕のある首飾りならまだしも、ガラス玉がびっしりついた首飾りへの取り外しは困難そうに見える、といった資料が多く残されています。このことから、現在博物館に多く残されている“耳飾り付きの首飾り”は、あくまで飾り/部品としての耳飾りを付けた首飾りがほとんどであり、着脱できる耳飾りが付いた首飾りはあまり伝世していないと言えるのではないかと…と未だ推量の域を出ませんが、こうした素朴な想いを起爆剤



写真1 2019年のクローズアップ展示「耳飾りのいろいろ」から



写真2 耳飾り付きの首飾り



写真3 2022年度の実習生達と

に、まずは、耳飾り同様、形を捉え、丁寧に分類する作業を進めています。これまでに行なった調査からは、部品の一つである飾り板にはある一定の規格や工法が存在することが見えてきたので、今後はこれを手がかりに調査を継続したいと考えています。

当館に着任以降、継続的に行なってきた博物館所蔵のアイヌの耳飾りと首飾りの調査。当館資料以外も対象としているため、道内をはじめ各地の博物館・施設の皆さんの全面的な協力がなければ決して実行できない調査です。これまでの調査でも、本当にたくさんの方にお世話になりました。今後は、いつか日本国内に所蔵されている全ての資料を調査する事を目標（！）に、私の学芸員人生における“ライフワーク”として進めて行こうと考えています。

衣服の調査も進めています

この7年間では、そんな“ライフワーク”に並行して、当館が所蔵するアイヌ民具資料の調査も進めてきました。現在、当館に所蔵されているアイヌ民具は約6,300点で、今からおおよそ150～200年ほど前の暮らしの中で実際に使用されたものが中心となっています。これらは、前身の旧北海道開拓記念館時代に収集されたものがほとんどですが、大変ありがたいことに、現在も、毎年数件～数十件ほど資料の寄贈をいただっており、日々、その受入と整理作業を行なっています。具体的には、資料の状態確認（健康診断）を

兼ねて、白黒写真をカラーかつデジタル写真で撮影し直し、資料の素材や作り方を観察し、過去の記録と照合するなどの作業を進めています。

2020年3月には、その成果の第一歩として、作業を終えた全156点の衣服資料を撮り下ろし写真付きで公開することができました[下記QRコード]。カメラ初心者が始めた作業だったので、最初に撮った衣服と最後に撮った衣服では、大分出来栄えが異なる写真になっていることは秘密ですが、当館所蔵の衣服資料の豊富さを知っていただく機会になったのではないかと感じています。その後も、ときには博物館実習生の皆さんの力も借りながら[写真3]、少しずつ着実に当館所蔵の資料調査を進めています[写真4]ので、今後の続報にご期待ください。

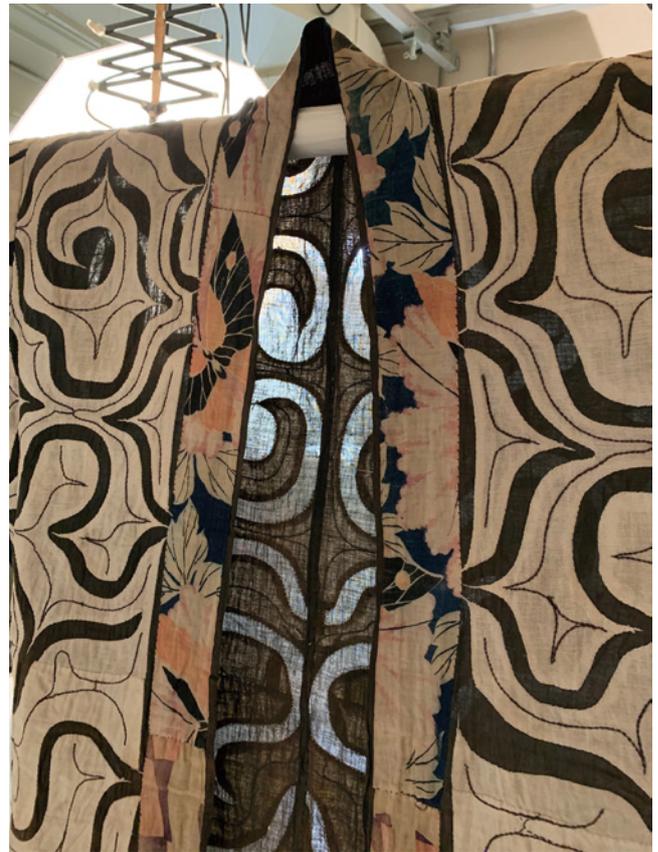


写真4 撮影中、衣服の布越しに撮影ライトの光を見る（光が透けるほど薄い布であることが分かる）

展示会も開催予定です！

その成果のひとつとして、2025年の4月末から、蔵出し展「アイヌの衣服—北海道博物館の所蔵資料から—」を開催予定です。詳細は、後日、当館ウェブサイトにて告知予定ですが、少しでも多くの衣服資料を皆さんに見ていただけるよう、鋭意準備中ですので、どうぞお楽しみに！

※本記事は、「ポーラ美術振興財団令和3年度助成『アイヌ民族の交易品服飾資料に関する基礎的研究—北海道内の博物館所蔵資料を対象に—』及び「日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：23K00938）『考古学的手法を導入した移入品アイヌ民族資料の基礎的研究—耳飾りと首飾りを題材に』」の成果の一部です。

こちらからDLできます



◀前半



◀後半

「アイヌの衣服資料(鞆皮衣・木綿衣)について—北海道博物館所蔵アイヌ民具資料整理報告1—」
『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第5号』2020年

解説案内スタッフレポート

稲わらのかおり

「こんにちは 今朝も寒かったですね」
冬の訪れを迎えた「はっけん広場」
からご挨拶です。

冬といえばわら細工の季節、かつて
農閑期には脱穀した後の稲わらで、わ
らじ、深ぐつ、みのなど身に着けるも
のから、縄、むしろ、ほうきなど暮ら
しに使うものまで、一つ一つ手ずから
こしらえていた先人にならって…とま
ではいきませんが、静かな冬のはっけ
ん広場で、よく叩いた稲わらを手に
取って少し土臭い、湿った青草のよう
な香りを嗅いでいると不思議と何か
作ってみたい気分になってきます。(夏
はあまり思わない)

当館で開催してきたさまざまなわら

細工の企画も冬期間が中心でした。
参加されたお客様との触れあいもたく
さんあって、自分よりはるかに年長
のお客様から「先生」などと呼ばれ、腰
のあたりにむず痒さを感じながら、伝
統的な稲わらのしめ縄飾りを指導した
ことも、冬休み終了間近に「ワラでミ
ニほうきをつくろう！（自由研究用）」
に挑む小学生を「だいじょうぶ、必ず
間に合う！」と励ましたことも楽しい
思い出です。

わら細工と言えば、大きなしめ縄や
立派なわらじ作りをイメージする方も
多いと思いますが、今年度「はっけん
広場」の12月・1月のイベントでは、か
わいらしい飾り物作りでわらに親しん

でいただくことをテーマにしました。

これからも寒い季節には多彩なわら
細工のイベントが登場する予定です。
心落ち着く稲わらのかおりを体験した
い方は、ぜひ冬の北海道博物館に足
をお運びください。

(越田雅子
学芸部道民サービスグループ 解説員)



12月と1月のイベント作品

トピックス

めざせ学芸員！今年も博物館実習を実施しました

当館では、学芸員資格取得を目指す
学生に対して、毎年8月に博物館での
現地実習を行う「博物館実習」を実施
しています。今年も、2024年8月20日
(火) から30日(金)の期間(26日(月)
を除く10日間)で、北海道内外から15
名の実習生を受け入れました。

初日は、収蔵庫の見学や、学芸員と
しての視点で総合展示を見学し、展示
の工夫や改善点等のディスカッション
を行いました。2～6日目は、当館の5つ
の研究グループが1日ずつ担当し、そ
れぞれの分野の専門的な資料の整理や
行事の企画等を行い、学芸員としての

「モノ」や「情報」の扱い方を学びま
した。また、6日目の午後には、開拓の
村へ行き、野外博物館での資料管理や
来村者への解説に対して、当館の事例
と比較しながら見学しました。7～9日
目は、3班に分かれて展示制作実習を
行いました。「総合展示の各テーマに
関連する展示をつくる」という課題に
対して、展示企画から資料選定、パネル
制作等を実習生が主体となって行いま
した。最終日には、当館職員向けの発
表会を行い、指導を受けた上で、来館
者にもみていただけるように総合展示
室に展示を設置しました。その成果は、

8月31日(土)から9月23日(月・祝)ま
で公開し、多くの来館者にご観覧いた
だきました。

当館の博物館実習では初の試みとし
て、博物館の大切な機能である「収集・
保存」「展示」「教育普及」「調査研究」
について10日間の実習のなかで考える
宿題を初日に出したところ、実習生に
よる日々の日誌からも、それを意識し
ながら取り組んでいる様子をうかがう
ことができました。最終日には、4つの
機能に対して実務経験をもとにした具
体的な考えや、それぞれの機能の関連
について思考を巡らせられるようにな
りました。

実習では、学芸員に限らず社会に出
た時に通じる考え方を伝えることも、
職員は意識して取り組んでいます。実
習生15名のこれからの活躍を期待して
います！

(鈴木明世
総務部企画グループ 研究職員)



産業資料の整理の様子



当館職員向けの展示発表会の様子

アイヌ民族文化研究センターだより

北海道立アイヌ民族文化研究センターの20年(上)

北海道博物館は、2015(平成27)年4月に、北海道開拓記念館と北海道立アイヌ民族文化研究センターの組織統合により発足した歴史を有しています。前身の一つである北海道立アイヌ民族文化研究センターは、1994(平成6)年6月、公設の機関としては初めてのアイヌ文化を専門とする機関として、札幌市中央区に設置されました。

今年度は、それから30周年に当たります。この機会に、2015(平成27)年3月末をもって組織統合により北海道博物館の一翼となるまでの20年あまりの歩みを振り返っておきたいと思えます。



開所式テープカット

1 設立まで

設立の端緒とされるのは、1991(平成3)年3月、当時の北海道知事(横路孝弘)が3期目を目指す選挙に臨んで掲げた公約の中に「アイヌ民族文化研究センター」の設立を明記したことです。

その背景には、1970~80年代にかけて、アイヌ語やアイヌの伝統的な生活技術(衣服の制作や木彫など)を学ぶ人々が、少しずつではありますが増えてきたこと、その流れの原動力や駆動力として、伝統的な儀式の復活や文化の継承、自分たちの言葉の学びなおしを目指す動きがあったことがまず挙げられます。

一方でそのころのアイヌ語・アイヌ文化・アイヌ史の研究は、大学などに所属する研究者を中心に進められてきたものの、総合的・体系的に取り組む体制や、それらを学習・継承の場に選

元することが十分ではなかったとされます。

1984(昭和59)年に社団法人北海道ウタリ協会(現公益社団法人北海道アイヌ協会)が総会で決議した、「アイヌ民族に関する法律(案)」でも、「アイヌ語、アイヌ文化の研究、維持を主目的とする国立研究施設を設置する。これにはアイヌ民族が研究者として主体的に参加する。従来の研究はアイヌ民族の意思が反映されないままに一方的におこなわれ、アイヌ民族をいわゆる研究対象としているところに基本的過誤があったのであり、こうした研究のあり方は変革されなければならない。」と述べられていることにも、これからの調査・研究のあり方について、それまでの反省も含めた要望が多くあったことがうかがえます。

2 事業の立ち上げ

アイヌ民族文化研究センター設立に向けた庁内の検討では、研究者とともにアイヌ民族で文化の学習・継承に取り組む立場の人々からも意見を伺う機会が設けられました。既存の道立施設

である北海道開拓記念館や道立北方民族博物館等との事業内容や研究分野の棲み分けや連携についても検討されています。

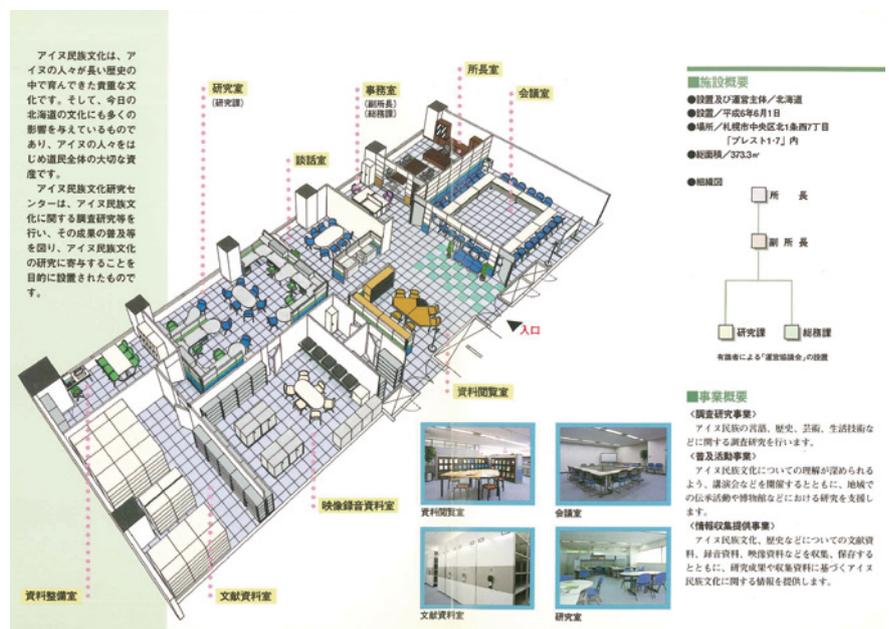
こうして1994年6月1日に開設されたアイヌ民族文化研究センターは、取り組む分野としては、従来の博物館等ではあまり取り上げてこなかった「言語・口承文芸」や「芸能」などの無形文化を中心に、「伝統的生活技術」「歴史」の4分野の調査研究に取り組むとともに、これまでの調査、特に道による調査記録をデジタル化して保存と集約を図ることなどを主な事業とされました。

6月13日に開所式が行われ、外部の識者の方々による「北海道立アイヌ民族文化研究センター運営協議会」にも諮って最初の5年間の中期計画を定め、様々な事業に取り組んでいくこととなりました。

今回は、設立からの20年間で取り組んだ主な事業についてご紹介します。

(小川正人

アイヌ民族文化研究センター長)



設立当時の平面図(リーフレットより)

活動ダイアリー

2024年9月～2024年11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月1日(日)

■特別イベント「鉄道と行商を語る！列島「ガンガン」サミット」を開催。講師：山本志乃氏(神奈川大学)、小林裕美氏(千葉県立中央博物館)、松井寿氏(愛媛県歴史文化博物館)、尾曲香織。

9月8日(日)

■特別イベント「フォーラム 北海道の「駅通所」を語る～その歴史と文化資産～」を開催。講師：戸田博史氏(別海町教育委員会)、畠 誠氏(北広島市エコミュージアムセンター)。

9月14日(土)～16日(月・祝)

■特別イベント「ミニミニ新幹線に乗ろう！」を開催。

9月14日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ⑧」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

9月15日(日)

■ミュージアムカレッジ「日記や新聞に見る北海道と樺太の鉄道」を開催。担当：三浦泰之・石子智康。

9月16日(月・祝)

■屋上スカイビュー特別開放。

9月23日(月・祝)

■第10回特別展「みんなの鉄道 ーがんばれ！地域の公共交通ー」閉会。

9月22日(日・祝)～23日(月・祝)

■屋上スカイビュー特別開放。

9月25日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：久保見幸。

10月5日(土)

■はっけんイベント「羊の毛でおバケちゃん指人形を作ろう！」を開催(10・11月の土・日・祝・振)。【写真1】

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ⑨」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

■ミュージアムカレッジ「オンラインで楽しむアイヌ語<初級編>」を開催。担当：吉川佳見。

10月6日(日)

■特別イベント「『海岸漂着物』への取り組みー2023年度調査報告ー」を開催。講師：高橋杏奈氏(北海道コカ・コーラボトリング株式会社 広報・サステナビリティ推進部)、志賀 健司氏(いしかり砂丘の風資料館)、浅井康孝氏(北海道環境生活部循環型社会推進課 一般廃棄物係)、圓谷 昂史。

10月11日(金)

■総合展示室クローズアップ展示①、②を展示入替。

①『蝦夷島奇観』写本から②：クマ祭り(2025年2月13日まで)

②新選組の元幹部隊士 永倉新八(12月18日まで)

10月12日(土)

■子どもワークショップ「親子で探検！森のコレクションをつくろう」を開催。担当：鈴木あすみ・表溪太・久保見幸・櫻井万里子。

10月13日(日)～14日(月・祝)

■特別イベント「北方世界の交易と貿易陶磁器(全2回)」を開催。講師：日本貿易陶磁研究会、鈴木琢也ほか。【写真2】

10月19日(土)

■ミュージアムカレッジ「国境の島：エトロフ島とクナシリ島ー億丸・改俗・勤番ー」を開催。担当：東俊佑。

■ミュージアムカレッジ「オンラインで楽しむアイヌ語<中級編>」を開催。担当：吉川佳見。

10月26日(土)

■第23回企画テーマ展「北海道のお葬式」開会(2025年1月13日(月・祝)まで)。【写真3】

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ⑩」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

10月30日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：吉川佳見。

10月31日(木)

■令和6年度第1回北海道立総合博物館協議会を開催。

11月2日(土)

■講演会「樺太アイヌによる言葉のとりもどし」を開催。講師：北原モコットウナシ氏(北海道大学アイヌ先住民研究センター)。

11月3日(日・祝)

■文化の日講演会「変わりゆく葬送儀礼と死生観」を開催。講師：山田慎也氏(国立歴史民俗博物館)。【写真4】

11月4日(月・祝振)

■特別イベント「アイヌ音楽ライブ マレウレウコンサート」を開催。講師：MAREWREW(マレウレウ)。



写真1



写真2

11月16日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ⑪」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

11月17日(日)

■ミュージアムカレッジ「お葬式に関する「モノ」から読み取るアイヌ民族の近代」を開催。担当：大坂拓。

11月23日(土・祝)

■ミュージアムトーク「企画テーマ展「北海道のお葬式」解説」を開催。

①じっくり見てみよう！アイヌのお葬式の道具。担当：大坂拓。

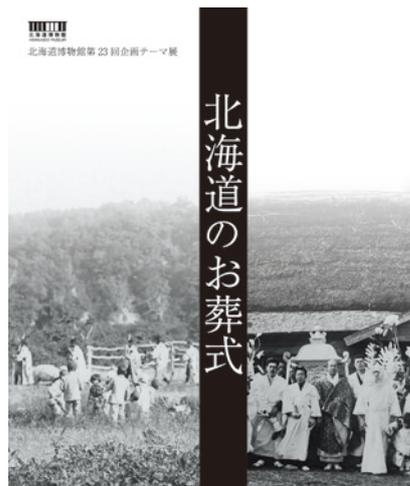
②じっくり見てみよう！移住者のお葬式の道具。担当：尾曲香織。

11月24日(日)

■ちゃれんがワークショップ「恐竜時代の岩石を使って、地質図をつくってみよう！」を開催。担当：久保見幸・圓谷昂史・成田敦史。

11月27日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：東俊佑。



令和6(2024)年10月26日(土)～令和7(2025)年1月13日(月・祝)

【時間】9:30～16:30(入館は16:00まで)
 【会場】北海道博物館 2階 特別展示室 【主催】北海道博物館
 【休館日】月曜(11月18日、12月16日)
 【お問い合わせ】011-898-0456(受付時間:12月16日(祝)を除く) 011-898-2657
 https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp

写真3



写真4

来館者数

○2024年9月～2024年11月

総合展示室 23,021人 特別展示室 10,154(内 特別展5,487)人 はっけん広場 2,169人

○累計(2015年4月～2024年11月)

総合展示室 876,758人 特別展示室 603,642人 はっけん広場 132,372人

森のちゃれんがニュース 第38号

発行日：2025年1月10日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp

©Hokkaido Museum, 2025